

遊行二十四祖御修行記(上)

河野憲善

編者序

水戸彰考館蔵「遊行二十四代不外上人修行記」をここに上梓する。原本は和綴七十四丁、「二十四祖御修行記完」とある。時衆にも一般にも稀観の書であり、室町期の著述で未だ世に公にされないものが今日なおあることは、寧ろ驚異でさえある。巻尾に一海上人跋があり、文政四年智阿が筆写したもの、その原本は二十五代仏天上人自筆のものであることが断つてある。

不外上人、もと臨阿其阿、永正十五年近江上坂乗台寺にて賦算、永正十七年豊州西教寺に独住、大永六年五月十七日入滅、六十七歳。不外上人は十六代南要上人資、十九代二十代二十二代上人同門であり、二十代資仏天不去上人に嗣法されている。
文意時に難渋、ままた字体明瞭を欠く。

廿四祖御修行記

永正十五年戊寅五月廿七日、廿四祖近江国上坂乗台寺にして化導うけつけ給ひて、次のあしたやわたの神光寺へ移り給ひて大菩薩の宝

殿において、代々うつりの時の佳例にまかせ行事あり、其次に奉らるゝ哥、此法の道ふみそめて名にしほふ神の光りの寺に入哉

そのおりふし上坂に宝融庵主梅湖と云老僧御定り夜、かの席をうかひみて作て献せらるゝ二絶序略之。

二月散人梅湖拜稽顙。

黄落山川不_レ似_ニ春_一 用_ニ時_一行化_ニ好_ニ縁_一因_ニ丁_一寧勸我称_ニ名号_一 瀟洒西方_一主人

海衆入社巨多千 笑殺東林十八賢 雜念専心陶謝在 遊行化廣感_ニ神天_一

上人和給同序略_レ之_マ。

大雅詩翁冬亦春 松風蘿月作_ニ良因_一 乾元亨利掌中士 美善芳名海外人

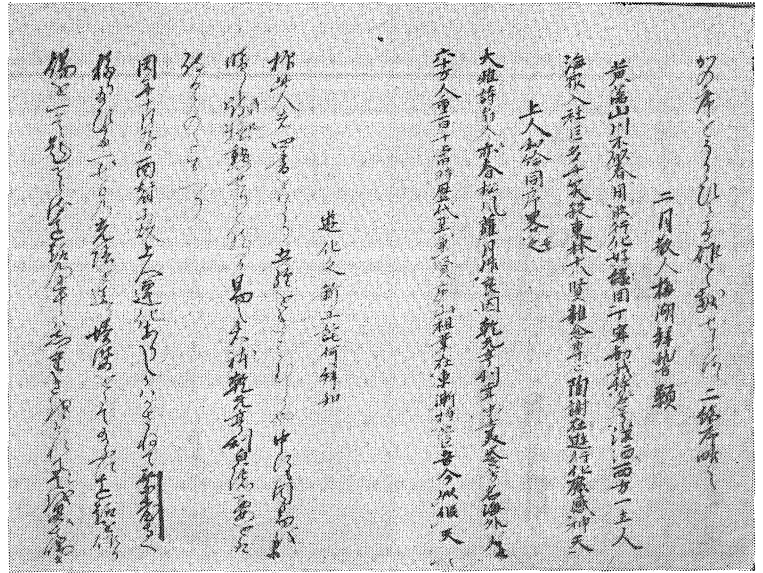
六十万_レ人重百千 当時歴代聖兼賢 廬山祖業在_ニ東漸_一 持管吾今似_レ候_レ天

遊化之新主_マ詫何_マ押和

抑此人は四書にわたり、五経をきはむとかや。中にも周易を曉し、詩格熟せりと。然間易の大躰乾元亨利貞の要を取待るとのたまへり。

同年十月九日酉時に故上人遷化ありしかは、かきねて乗台寺へ移り給ひて一七日の光陰を送り、塔婆をたて給ふに意趣を作り、偈を一首題せらる。意趣の事はしげきを、そして是を寫す。其偈云、
 附法師々当レ莫レ窮 弥陀一教萬年通 応レ思跋提銀河浪 故聖皈西湖水東 其砌遺弟図ニ真影ニ彼贊曰。

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)



遊化文新工能何解如

五十四年(マ)皈寂夕 称名声(ツキテ)竭月孤斜 法孫(リ)拜像祭如(ナリ)在 当座道場諸
 仏家

法の師の今はの時に此外はことのはもなし南無阿弥陀仏
 かくて修行の地うつりかはりて男山へ詣給ひて手向奉らるゝ一首、
 いにしへの我名といひし此法をひろむる道や神も守らん
 和泉の堺にて始ての会に発句、

露こほりふるや初雪(マ)あは地(マ)し(マ)万(マ)

彼の天のさかはこの一滴良国のはしめと成となれば今又国々化儀の始の一句におもはへ待るとなん。

翌年己卯元日試筆、

江南風景日当(マ)新 元旦雲霞見(マ)海浜 楊柳梅花早知(マ)節 泉州永福寺前春

この春是より西の方兵庫浦に一遍上人の御旧跡へ参詣を遂給ふへき心あてにて同日の詠哥、春はけふ西の空にと門出(マ)して生田の森に霞立なり

又過し歳暮一行三昧の心を今日(マ)かき出し給ふ。

諸仏立前三昧定 一心不乱念練閑 年々既去(マ)幾行力 門葉(マ)心昌萬歲間
 もろくの仏も交る法の庭にいつれの神か来らさるへき

同しき二日会はしめに、

代々に梅つたへつたふる色香かな

当春之試筆□ニ拜(マ)閱 而泉堺市中之隠士靈斎庵主見(マ)知焉。七旬之老僧也。并序。

夫当代上人者一遍大聖之遠裔廿余世之高師也。諸徳兼(マ)数代ニ而一世傑

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

出也。是以接物利生之勲在二千一簣不覆之先一矣。弗畜一行三昧一夙而入三千儒門一尽五車之書一暇日遊三千詩場一熟三詩家三法一也。可謂意達也。句達也。己卯之春和一新字之韵一賜予清話之次使予拜闕一詩韵瑣々然洗三耳塵一而也。於是弗能一緘黙一強倚一前韵一綴一俚語一絶一謝一萬一以塞三尊答一云。

片雲子頓首

尊和驚看字々新 老頑慰意寂寥淚 清吟招得晚唐句 更覓詩人一豈問春 廿三代上人永正戊子五月十九日薩州鹿兒島光明寺にして入滅ありしかは中陰執行おはりて当代の修行の地へと遊行の大衆赴て豊後国よりをのく乗船して次の年泉堺永福寺へ正月中旬の末に着ぬ。時に一老其阿弥陀仏へつかはさるゝ一首、

舟なかつ心ちしつらむさつまかた興こしまにありし別は 為廿三祖御吊之勤行結願の日高丈の塔婆を建立ありて意趣を述て并偈をむすひ給ふ。

行尽九州千里外 死生有命私寒灰一先師西域樂邦去 遺弟東方泉国来 冀以、究竟無余之积尊猶示雙樹之方便一長寿勝妙諸天未一免五衰之愁憂一矣。爰当門徒第廿三世上人按彼平生一矣。四十五歳而統於先師之高躅一四十九歳而感於最後之沈痾一唱滅度於薩州光明寺一遷齒骨於豊州称名寺一焉。時數百之遺弟之心悲併如失一暗夜之行路灯一始似離江河之群魚水一矣。然云下之(右三補心)大衆僧尼老少以下至一非人癩者一令乘三三四巨船一經一歷數月之光陰一凌三来千萬里波濤一着三岸乎泉州堺浦一是舊代々祖意成三風帆一者也。介然哉、門下之法力。蔚然哉修行之威光焉。抑余十歳勝三故聖之齡一矣。例者元祖者五十一而入三涅槃一、二祖者五十三而為三化主三給矣。是皆遲速者出世之時機相应之由来也。所以者何

尺迦者出三現千滅劫 弥勒者出三世千增劫一焉。廬山之惠遠公者兄也。惠持法師者弟也。而兄者保三長生一弟者為三早世一焉。亦復釈尊者雖一可為三弥勒之後仏一依三立振即行之力一既招三越於九劫一兮。先三立於弥勒一兮取三正覺一云々。

吾不知先人亦有立振即行之内行一歟。又吾不知予先世結三宿因於曠劫一歟。嗚呼是共以三命也。引三古鑑一今准の少彙也。今日追躡之勤行事終而起立塔婆。仰願法燈倍增光兮垂三慈尊出世之暁一門葉弥繁榮兮期三星霜多劫之春一焉。乃至百花千草生三菩提之菓一六凡四聖遊三功德之林一又回向之偈云、

白骨擊榛雲外土 古今仏祖有西来一 番々世々皆成道 殘老斷腸悲死灰一 永正十六己卯年正月下旬日佗阿白敬

博多称名寺前任其阿日州鉄肥之 金林寺住僧也当年二月永福寺勸化逗留之中有ニ參

候 其砌進献之一絶云。欽作野詩一章呈上人玉蓮坐下以奉賀踏 昨之尊儀一。

慈斤多幸

其阿九拜

值遇菟花三会春 天光十界祖風新 殘生曠得聖時代 最上可憐最下身 卒慶乎先韵一厥情見三千詞一矣。憶昔文王出世春 太公天下在相新 吾今添得此賢老 莫惜風前朝露身

行雲齋詫何

津の国柴嶋仏土寺其阿弥陀仏捧らるゝ短哥に云、
なにはつに 咲やこのはな にほひつゝ つたへきにける
ことの葉は 神の御代より 川竹の なかれ久しく
たえせねは 今もはこやの 山かせの 枝もならさす

しつけしな わかの浦なみ そつたへに 行末までの
 ためしにも よその嶋まで きこえつゝ かゝる世にしも
 あふ坂の 関のし水に むもれ木の 人しれすのみ
 くちはてゝ しつめる事は から人の 三代にもあはぬ
 なげきにも かはらさりける あはれきよ かくて二十ハツヂ
 四の御世 法の恵を かけまくも かたしけなしや
 をろかなる 身はしもなから ことの葉を 天津空まで
 きこえあけ 春に逢ける 心ちして 池の蓮の
 花のいろ 野にも山にも 匂ひてそ 人をわたさむ
 えにしとも なからの橋の なからへて ふるき道をも
 おこさまし 是やむかしへ すへくつひきの 宮にて説し
 法のみち 二の門を さしなから その暁の
 御仏に つたふる法を なぞらへて 秋のものなかの
 月かけの いたらぬ方（か）は あらしふく 雪をいたゝく
 老か身の 朝に道を きゝつゝも 夕にきえむ
 うれしさを えやはつゝまむ こゝろなく なむあみた仏と
 となへける 声のうちより こゝをさる こと遠からて
 かのくにの 光のうち返しに 住にける哉

あすか井の 深き心を 汲伝へ あまたの春に
 なれくゝて みしは名残（編入）の 花のかけ にほふ詞に
 をく露の 玉をならへて 光ある 螢をあつめ
 雪をつみ 学し窓も いちしるく さても此世に
 小車の 我みはめくる 道にいて 過こし方は

遊行二十四祖御修行記（上）（河野）

千はやふる 神の御山の 熊野より 受はしめつる
 法の師の あまねく照す 日の本の 西方ヨモの国迄
 うへ人と あふく位は 十といひ 二にあまる
 四の名を 塵に統とや ちりの身の 命おしまむ
 こゝろなく たゝ行水の 末とをく 萬の年の
 くれたのち 百とせまでも ひろめつゝ 此一こゑを
 とゝめんと おもひ返に 七とせの うちにあまたの
 代をかきね うつりかはれば のこる人 西の海より
 こきいてゝ 八重の塩路を しのきくる 心つくしを
 しら浪の たちゐに待て 日をくらし 夜をあかしつゝ
 鳥がなく あつまのかたに 玉くしに ふたつどころ
 あけすてゝ おきに出ぬる あま人の 船なかしたる
 心ちして よらむ方なき 思ひをも いかほの浪の
 いかにして ことに出つゝ もうさむと ひとつの胸に
 おしこむる 折ふしに今 通りのあと 送りし人の
 ことくきを うち置かたみ いひしらぬ 道にしあれは
 津の国や なにはのあしき ことの葉とみよ

かの短哥の作者はやくの年より七旬にあまる迄難波津の道に望をか
 け、飛井の二楽軒宗世より印可せられ侍るなり。あつまの方に二のと
 ころとは見のゝくに関の事をさせり。
 又ある時仏土寺へつかはさるゝ詠哥に、
 法をさへ捨（か）ねとそとく老のゝち心とゝむるしきしまの道
 法尚（つ）応捨何況非法の心とかや。
 又ある人のかたより奉らるゝ哥に、

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

あつまより弘し法も立春も君か恵に久かたのそら
となんきこえければ御返し、

東路にいたりて遠き法の水たえし流を又結はや

津の国兵庫真元寺にて諸神法楽に十百韻を始給発句、

花に月むかしの春のひかりかな

ところは福原の京の旧跡、寺は 先祖上人の旧跡なり。心を合給ふものか。

江州小野の宮へ参詣の時奉り給ふ一卷云。

去永正十一甲戌春三月廿四日夜、瑞夢云。

予引率於大衆二兮参詣干 当社二兮。令経過中殿之回廊二兮。到三大

床二即掛腰於繩床二向三面於南方三温湯於内朱外漆之盥二欲三洗足二而

見三彼器物三炊飯満三其中一。干レ時有レ恐惶之心二爾而神官命レ予曰、大上

人宝殿可有二入御二云々。余即遂三参内二兮、焼香礼拝而成三十念廻向三畢。

此儀所懸 神慮也。因以今日結二一偈一粗題二旨趣二者也。

当时大聖与二 尊神一 ヒ勅契盟其告頻 六歳夢魂逢ニ去歳一 古今護法

我知レ真

永正十六己卯五月廿一日 廿四世他阿弥陀仏敬

翌月再而相遷干上坂乘台寺一給。其時之詩并レ序。

余再来之砌至三千門外二兮下レ於レ輿兮即不レ入三干仏前二兮。向三先師上人

之石塔一。時脱帽避履而令三長跪合掌一矣。此剋有レ風無レ人而玉扉俄然

而開矣。併 聖君如レ在殆似レ蒙ニ尊命ニ弥発ニ竭仰心ニ倍銘ニ感涙肝ニ者也。

因以綴三拙偈一述ニ卑懷ニ云。 乞願昭鑑

冬別ニ 先師ニ夏此来 斯辰石室自然開 尊靈有レ語如ニ相對一 何日同ニ

生半座台一

又真影前に奉らるゝ哥、

神無月去年の時雨のふる跡に又袖ぬらす五月雨のそら

近江国より敦賀へ赴き給ふころ、国々大概飢饉し侍る間、氣比大神宮

の御前の御道造りも要脚調へ難に付ては 神慮くもりなくしろしめす

へし。此度はさしをかれてたゞ法施のみはかりに参詣あるへしとの儀

定内の落居ありけるに、その隣地井河の新善光寺へ移り給ひて後ある

夜、河越の宿相阿俄に発病にて前後不覚也。良ありてかたりけるは、

今夜う地まところむころ御道造をなされんとて相阿承り公物の入へき限

り注文を書て捧ると、夢みてやかて振付ぬ。此趣を披露に及はれて御十

念あらは定て虫もしつまりなむと申。則中夜の勤の始まるころ彼の宿

所へ出させ給ひて御十念ありしかは、御還りのちしつまりぬねてい

く程なく本心に覆しけり。時に上人感歎ありて大上人の祖意も亦 氣

比大神宮の神慮も一代の其数とおほすにこそとそ。しからは冥慮にて

かならず此度の儀式成就してんとよるこはせ給ひぬ。果して六月十日

に西方寺におはせしにはからす十一日に諸人合力の事ありける間、午

剋はかりに明日加例の儀式を遂へしとの給ひ出させけり。誠に此度は

幣とりあへぬ程の事なるに、海衆 輻湊と来り集り瑞籬の辺りより浜

ひさしに到る迄道俗男女眼をつめて道去あへぬ程所せきなりき。癡し

たる道をおこし、絶たるところを継せ草をけつらせ沙を運び侍に貴賤

思ひくゝの衣服を着し老少取々の器物にて荷戴しける間、辰時より未

剋はかりに造り納て、其後惣門かたはらにたかく棚をかまへ餅子をつ

ませ僧俗に手つからひかせ給ひ、をはりて客殿に帰座ありて沐浴以後

太神宮へ大衆と共に詣給ひ焼香惣礼等恒例のことく行ひ侍りて短冊を

参らせらる。法の師のつくり初し此道を伝て神にまうて執賀那

次の日、上宮へ徒衆あまたの船にのり漕出らるゝに、俄に南の風吹出て幾程なく着岸ありて、日中の行事執行給ひて、又船にのり押出させ待るに十町余の程は浪風もなく見えわたりしか、やかて北風吹出て又々追手心のまゝにして待る間是則 神慮にこそとて一首を手向らる。

けさはみなみ夕は北の風にして追手や船も神のまにゝをのゝ同船供奉の衆説哥有、着岸の後、清書して神主へつかわさる。抑上人御在世の時当津御逗留のう地、近江国小野宮大菩薩の神

主法名炊阿に神詫有て云、上人を当社に請し奉るへしときりに告有ければ、海津へ御迎に舟を参らせらるゝ日は南風吹、翌朝に乗船し給へは北風になりて順逆意のことく侍しとなむ。古今の不思議符節を合たるかことし。是併末師の戒徳にあらず、大聖と神慮との御契約の余風なりと信をとり給ひけり。先条に注せることく去甲戌の仲春廿四日の、小野の宮よりの瑞夢に神官当代へ対し奉らるゝ大上人神殿へ入御あれと云一言と廿四日の告、廿四代を冥にあて給ふか。又此度井川おいて御道造のさいそくと今日の南北両風の追手とふたつの御神と申、ふたつの在所と申、二祖の時にかはらざるもの也と随逐の老僧批判有き。去程に十四日にきのめたうけを越給はんと荷造以下たやすかるへからず。然れば船にてかうの浦へ七里の渡りをこし奉るへき由、ところの代官申ける間其旨に任せられけるに、此渡海は難渡なりと人々申あへるに、又俄に北風追手に吹出て半日斗に事ゆへなく船着ぬ。しかくして遊屋の宿と云所にて中飯を長崎の末寺よりとゝのへけるに疾雷なり暴風吹来り、大雨車軸をなかつ程にふりあれけり。此風雨半時さきにかくありしかは船皆難渡に沈むへしといひあへり。弥おかの順風

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

神慮の儀顕然たるものか。

同月十八日に五十八社参詣有之、前々のことく行事過て、一首を手向らる。昔正応三年に大上人へあすよりはたれにとはましの神哥を思ひ出給ひて、

木綿してをかけてやらしの法の師の其跡守れ萬代までに長崎称念寺へ移り給ふ比、光明院覚阿当住持の影像とて名号を申沙汰有しかは一首を題、をくらる。

十あまり二の代をし続寺の称念は南無阿弥陀仏
同ころ七夕に、

天の河とをき流のま砂をやけふのあふ瀬の数に契りし

月と日のめくらむ程は法の名も星の相瀬も絶しとおもふ

予州奥谷宝嚴寺へ去三月津の国兵庫より人を遣され、両尊の衆一処俱会の砌なれば、勤行声博士調子等指南のために当坊主召もよほさる。然るに折節檀辺の儀につるて差合事有て、七月半に越前の国の兵庫光触寺に御移の刻、参着有それより夜を以て日につき声をとゝのへ

ほと拍子の沙汰あり、そのころ書て宝嚴寺其阿へつかはさるゝ短哥、
たひころも はるのそらより たちいてん 事をしきそひ

やる文の 鷹の使も 帰り来て かたるをきけは

しら浪の 八重の塩路を からくして 渡りし船の

梶まくら 夢も結はぬ うきねをも うきなから又

こん人の 心つくしを かねてより おもひゝて

夏もすき 秋のはしめの ふみ月の 十日あまりに

まちえつゝ みれはいにしへ なれゝし すかたも老の

さかこして 六十にちかき 翁さひ 人なとかめそ

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

われはなお よはひの程も ますかゝみ よそのうへて
 をとろふる 我身のかけも みるはかり 涙いかなる
 物なれば 逢かたくして いまあへる 此うれしさを
 つゝみかね うるはず袖と なりぬらん 是やくれの
 ふりをける ならの都に 寺たてし 祈のために
 法の師を 月の名におふ 国よりも むかへし時に
 難波江の 岸にあかりて よむ哥に しゃかの御前に
 契りてし 真如くちせず あひみつと いひし昔の
 ことくさも 思ひ過せは こゝに又 浮木の龜の
 たとへまで まれの逢せに 思ひあはせぬ

右宝殿寺当坊主素生武州の人也。十九代上人の御弟子になり、本調声
 をつとむる斗、廿一祖の時代迄身命を尽せり。即廿一代宝殿寺へ下向
 せられき。

抑賀州潮津西光寺にやすらはせ給ふ折節、越後より越中へ弓矢を取か
 けて乱入あり、然間修行の道前後を忘却し進退共にたよりをうしない
 給ふ間、長崎称念寺同末寺の年寄衆を召請せしめ両尊の衆儀平従しけ
 れ共、是非ひとみちの異見にも及はれぬ間、八月廿三日に此修行を先
 々さしをきをのく所縁にまかせちらすへきよしのたまひ出し給ふ
 比。夢想の告有、時に詩并序云、

永正己卯仲秋廿日之曉感ニ夢想ニ矣。第二第三句也。因以相ニ統於彼前
 後ニ耳即用ニ於唐人長繼本韻。然而後拜ニ進干聖廟之影前ニ矣。遊行廿四
 世他阿弥陀仏上。

両句神人示ニ夢中ニ 青山不レ改旧時客 来迎引接可ニ何日ニ 眠覚猶聞半
 夜鐘

西光寺にして五十日をくくり給ふうちに越後衆退散して越中衆無為に
 属してやかて出歩し給ふものなり。八月十五夜の一会に、
 月もわかかつらをおくらはこよひかな

十九代上人の御影贊、伊予の宝殿寺其阿所望に付て、
 釈迦尊像在清凉一 濟度万年盟約長 十九上人真影像 利生猶可四
 州昌一

忘れし其佛をうつし絵にむかふ度にや南無阿弥陀仏
 為ニ齋藤別当眞盛ニ於ニ篠原ニ塔婆銘曰。

當時魂魄結縁 後 累代祖師斯地来 可レ識眞阿成仏日 高名錦服既
 塵埃

聞説。齋藤別当眞盛者平家重職之良從武略無双之勇士也。匹夫志冠ニ
 干群侶一兮忠節嘗長三千衆臣一兮。然臻三千此地一兮討死畢。粵ニ吾祖第十
 四世上人脚ニ躡干西光寺之砌。彼亡靈觀云仰願尊者得レ免ニ 於鬪諍之
 苦域一令レ入三千和合之楽邦一給。干レ時法三千昔日之諱ニ即見レ授ニ戒名於眞
 阿一。噫嘻時耶。命耶。如レ斯為一之奈何。自レ爾以還十一代之祖師当
 所遷来之刻。令レ起ニ立於塔婆ニ兮棟ニ爾於仏果一矣。今亦予題ニ小偈頌ニ
 旗ニ其旨趣一者也。抑世話曰勤レ悪者讎又勤レ善矣。誠哉此詞矣。循々然
 乎 仏祖之法力。恂々如乎精靈之願心矣。希源平両家一陣一戦之軍勢乃
 至修羅患苦之群属法界無差平等而已。永正己卯年秋上旬日。

ある時の会に、 旅宿夢

さよ枕かりて越えはや飯にむすあはれわか身の夢の行衛を

山月

分ていつ日を又みむ馬草かるかまくら山の露のふるみち

越前幡岡仏徳寺十代坊主弟子彼影像とて名号申沙汰せし時、呼レ名出

現。本来、仏豈借工夫一聞二面目。

知や今な^{（お）}にの御法の道も皆南無阿弥陀仏の声有とは

廿二代一周忌卒塔婆之銘、

春往秋來人不復、花開葉落我無^{（わ）}忘、去年一別曉風夢、殘月西明本有

光

朗觀。半日見^{（わ）}花芳友之春、契不^{（わ）}淺一霄、既^{（わ）}月來客之秋興猶深。何況於

大善知識之因縁一哉。何矧於^{（わ）}附法相承之深恩乎。以^{（わ）}爰、先師清淨光

寺第廿二代他阿上人相^{（わ）}迎諸還之辰、東西之大衆面々之志各々之營也。

厥^{（わ）}仏眼素照^{（わ）}寸心、福田空^{（わ）}嫌^{（わ）}小善乎。仲尼曰、慎終追遠、民德^{（わ）}敏^{（わ）}厚焉。

抑故聖平日之風志、諫^{（わ）}乎小弟、兮勸^{（わ）}乎螢雪之字、果而欲^{（わ）}令^{（わ）}為^{（わ）}一宗之

法燈、訓^{（わ）}乎法侶、兮琢^{（わ）}戒行之玉、遂而擬^{（わ）}令^{（わ）}為^{（わ）}一門之明鏡一者也。此

外慈心之徳記録不^{（わ）}違。然間老若僧尼集^{（わ）}会于本誓寺、三日之勤行三夜

之念、仏時々刻々不断也。尊靈定有^{（わ）}來臨于道場樹下、須^{（わ）}下相^{（わ）}交、自光於

行道徒衆^{（わ）}給^{（わ）}。仍造^{（わ）}立^{（わ）}於小母^{（わ）}馱^{（わ）}、述^{（わ）}作^{（わ）}於小偈、頌^{（わ）}所^{（わ）}備^{（わ）}報射之資糧一

焉。庶幾已成^{（わ）}窮理聖^{（わ）}、真有^{（わ）}遍空威^{（わ）}矣。倍布^{（わ）}慈雲於三界、弥注^{（わ）}法雨

於十方^{（わ）}焉。敢乞^{（わ）}遺弟各至^{（わ）}畢命為期之日、竭^{（わ）}奉事師長之孝行、共待^{（わ）}來

迎^{（わ）}引接^{（わ）}夕^{（わ）}為^{（わ）}樂邦常住之伴侶^{（わ）}而已。時歲永正己卯孟冬初九大衆^{（わ）}敬

同時博多前住^{（わ）}干時^{（わ）}發^{（わ）}其阿用^{（わ）}先^{（わ）}韵^{（わ）}見^{（わ）}奉^{（わ）}和偈云、其阿九拜。

廿二先尊歎^{（わ）}訣別^{（わ）}、徳容温潤^{（わ）}執^{（わ）}相忘^{（わ）}、從^{（わ）}元聖果自然^{（わ）}、躡^{（わ）}善惡無^{（わ）}差^{（わ）}撰

取^{（わ）}光

又

欽奉^{（わ）}供^{（わ）}、御遊^{（わ）}廿二世一周忌辰牌前^{（わ）}、伏乞^{（わ）}靈鑑昭徹^{（わ）}、其阿稽顙。

出世番々廿二雄、還來穢國事^{（わ）}神通^{（わ）}、十方^{（わ）}濟度今何^{（わ）}処、去歲別^{（わ）}南浮

遊行二十四祖御修行記（上）（河野）

日東^{（わ）}

又上人追^{（わ）}膳^{（わ）}之御詠哥、

山のはの時雨もこれか一めぐり月にしくる、おもかけの雲、十月な

かはの比、賀州梅田光撰寺へ移らせ給ふうち、奥谷宝嚴寺下向に付て

一会^{（わ）}有^{（わ）}御発句、忘れめや声に霜ふる小夜^{（わ）}衛^{（わ）}

同脇宝嚴寺其阿、茅原にさゆる月の河風

十月廿日光撰寺をた、せ給ふとき、のこし置せらる、彼前住は十二代坊

主に当れり。平生^{（わ）}帰命を先とし、寺家を興せり。濃州二岩に故上人在寺

の砌、兩度^{（わ）}參候ありて、一度めに往生をかしこにて、遂侍り、此刻梅田の山

なる大木の松開山以來の植木なり。恋慕しけるに、や坊主^{（わ）}出行の時分よ

り色かはりて、没後に枯ける程の道人なり。誠に、拔提河の四双の植木に

ひとしきものか。

夢うつゝおきふしそひてなき人の面影さらぬ宿の朝夕

道ありし人をはたれもしのふ草、其たねのこせふるき軒はに

此心は当坊主を御いさめのためとかや。

同国富田花林寺にて、霜にいまみるさへ花の林哉

越中報土寺へ十一月十一日に移らせ給ふ。此寺は上人三十余年居住の

地なり。近きわたり朝日^{（わ）}の観音とてむかし蒼海よりあからせ給ふ千

手の靈像まします。永正十五年正月五日の夜、此とし化導あるへき瑞

夢を感じ給ひて、同月十八日に縁日なればとて御代官として、寺僧をま

いらせられけるに、此使者^{（わ）}帰路のとき南風俄にはけしく吹来り、かふ

りたる物を吹さそひて四五日山きのかたへ吹おとせり。そのわたり

雪ふかうして道たどぐし、行て帽をとりあけるに、したにすけ笠の

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

いまた人の着さる有。そえて帰りぬ。ある人これをあはせて云く、笠は旅の道にて頂上に有物也と云々。果や。同年九月その夢想と瑞相とあるて修行のうへにて翌年十一月帰国ありて、彼の観音の告を思合て、のたまはく、見義不為無勇也と云本又あれはとて又次の年の正月十八日重て御代官をまいらせらるゝとて、大なる名号に一首を題し給ふ。

むは玉の夜の夢路に兼てみし朝日の山の光をそしる

遊行と云事を

遊行法の車のわか心神や仏のひくにまかせむ 同報土寺におゐて別

時取行給ひしに、廿九日辰の時すこし法座にして睡侍に、幾代ともさしとをの庭の雪、と見侍り給ひ、即是は仏勅なれはと思給ひ、其座にて手つからし給ふに、二重の庭ともをもてかけかこひたるに、朝日のかけとをりて彼示現の句を注し給ふ紙筆を照しけり。抑永正九年壬申八月廿代上人入滅以後翌年廿一代上人五月遷化、同十六年五月廿三代上人同十月廿二祖涅槃に入給ふ間、内々門徒の事心ほそく思ひつゝ侍しに、幾代ともさしとの告を蒙らせ給ひて安堵し給ふとや。此心を作し給へり。

般舟三昧定中静 不覺睡眠屋一章 有命萬年斯法壯 仏神共是感 応長

かきりあれはことしもけふに暮にけりたのまで又や春に逢なん
庚辰正月元日於報土寺試筆。

南去北来還遇春 々秋旅雁共聞 今年六十一 年裏 過年天涯千里 身

雲の上にとしむかへはかのへたつ六十の老のさかもこえきぬ

二日加例の会に、越てとしけふや二葉の花のはる

二月上旬に氷見と云所へ大衆と共に出させ給ひき。しきひは去年の九月越中へ能登越後衆同心に打こえ侍りて此所におゐて一戦も有罷と衆数百人討死す。その弔の為也。高丈の塔婆を立、勤行有。頌云。

輕命重義忠節士 吾今回向此軍場 大悲順逆二門照 横截弥陀利劍光

右意趣者恐レ繁略レ之。

報土寺におはせしうちに、ちかき日ある女性まいりて十念うけ、名号を給はりて後の夢に、上人にたひし奉り、ありし結縁のときの心ちして一首の哥を見侍るとて重て参り人して奏しけるは、

何事のそれを是とはしら雲のかゝる御法をうるそうれしき

となんきこえし。此女性は兼ては哥をはよまぬ人なりと。抑此趣向誠に他力本願の深意こもれり。一代教主の尺迦如来すら阿弥陀の三字をはひるよる一劫の間、この功能をとく共尽すことあたはしとなり。ことに我宗の安心は信不信をもたさす浄不浄をもえらはず唯南無阿弥陀仏と唱ふる斗、熊野権現の神託 一遍上人の相伝也。其せうこは老たるにもをさなひにも南無阿弥陀仏とたにもこゑに出て唱れば算をさつくる也。是又ある文に、不浄不浄心乱仰念弥陀即得往生と有。もとより念仏往生のをこりは、天竺こくのいたいけぶにんのはしめにて、女人往生の縁起となりしは、五百人の侍女もおなしく如来の記別に預りしなり。法花の女人成仏は八歳の龍女也。それ三千大千世界にもかえましましきほとむけ宝珠をふせし奉れり。しかも女人なからは成仏かなはずして變成男子して南方無垢世界へ生れし也。然に韋提は女人の身ながら記別をかうふり一人のみならず五百の侍女まで往生

をとけし事、念仏と法花との分別有へし。
又々次ツギよろしくおほし給て一首をよみて、同おかやうにことかきをし
てあたへ給ふ。

なに事としらすはからず唱れはなむあみた仏に後はなるなり
此女性メノコは麻生谷のなにかしの妻女なり。越中の国人也。

報土寺の庫裏役クラノクもち、梵阿過し年、念劇に事よせ、秋の寺納弓矢にと
りままきはして引ちかふる事おほかりしにとかく打をかせ給ふに、し
わすの暮まてますく、無沙汰の子細ありける間、別時のなかはより出
仕を先々とめさせらる。追放程おほの事はなかりけるに、正月十八日よ
り傷寒を此梵阿惱出で幾程なく物くるはしくなり、おさめのうつは物
を取持て地下人の家々へかけいり狂乱しけり。そのうち病増氣して正
月廿三日に死す。此よし寺家より披露に及しにのたまはく仏物をこま
うによて仏罰を忽に蒙るうへは我ゆるすへきやうなしとて捨をかれ
て、又のたまはく、此諛うそならば重て其しるし有へしと云々。然に二月
なかはの比、親類なりけるをおんなみこをかたらひて口をよするとか
や。時にこの神子にのりうつりて死人謡しけるは我身欲念のあやまり
によりて寺領を掠侍る故御とかめに預りたちところにおいて仏智のせ
めを蒙れり。是によりて後生迄も捨れまいらせて沈淪の苦をうく。ねか
はくは我にかはりて上人へせせう申、御たすけに預るやうにといひて
涙にむせひぬと申と云々。同かの死人とくみして侍る寺の下人の男同
前に発病して死せり。これは在家のものなれはとて、やかて法名を授
け御代官をつかはし取をかせられけり。扱又不住生の不道人の事報土
寺御立の砌仏前において藤沢遊行本僧等にかの件ことのことはりを演給ひ

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

て本名を改れて御十念有。誠に希有なり。不思議なり。筆にのこす物
はもしゆく末にみる人も有て現在僧物をもをかきぬためしにとて此儀
をは日帳に注させられしを今此一巻に写す者也。かの横惑者をはしめ
ては捨らるゝこと諸人見聞の衆後を慎せんか為也。是抑止の心かはたし
ては助させ給ふる撰取の悲願と有難く覚侍き。

同永正十七年四月四日越中小津を立給ふ比、黒辺四十八、瀬水かさいと高
き比なればとて、檀方シキナ椎名新七郎前後の浦より船をあまた集て、海上
をくくり奉らるゝに石田と云浦に報土寺の末寺有。過し乱にあひて道
場はかり屋にて侍るとて寺の本尊を浜へ出し奉りて、御十念を申さた
する。亦いるかと云大魚其数をしらす汀近く御船の前後左右をかみし
もへと残る事半時はかりのうちに三度なり。時に上人ナキヤ渚のま砂の上に
て硯をとり出させ給ひて詠しもて手向給へり。

此法を思ひいるかと成にける神のちかひの海ふかくして
件の一紙ひとの事書に我祖 一遍上人出世の後氏神にいます伊予の三嶋大
明神に詣て給ひまた修行の道に赴せ侍りし日、いるか数千うかひ来り
て御座船の跡先あとをかこみとをりし夜、御神けきやうし給ひて、上人に
対しまいらせてのたまはく、われうほと現して送り奉りしをはしろし
めしきやいなやと告給ひて、又のたまはくたとひ萬代に及とも法孫渡
海の時には必かく化して守護し奉らんと誓おはします事、廿四代の
今に至る迄かはらざる事を思合侍りぬと云々。在所の海人も申けるは
鰻うなぎとをる事候共かやうに汀ちかく人をもをそれすある事ためしなく候
こと云々。又其後越後田伏極楽寺おほをたち給ふ日能生と云所へうらつた
ひにかちよりしてつかせ給ふとき、又いるかかみのかたより送り来り

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

侍る比、八旬はかりの聖道の老僧上人へ申て云く、先年も御遊行当所へ御うつりの日かやうに現し来り候き。御十念候へと申。上人はやゝ御十念なされ候と御返答有ける比、いるか越中のかたへかへるやうに浪路はるかにみえける。抑過し三月のはしめ越後より越中へ飛脚を立て申けるは、去年の乱以後は国さかひの通路もとまりぬ。ことに敵国より大衆うつらせ給ひ候へはいふかしき事も侍りぬとて御修行をおさへとかめ申時にのたまはく、諸国修行のならひ弓矢のなかをも敵味方送り迎をえて透申事、此化導はしまりし昔より今に此分也。我為に新関を立て押通さん所迄移るへしとて重ては案内に及はず。去歳の秋、来春御座を移され候へと云、返礼の案文を写して彼飛脚にことほりきかせ出して移り給ふ。然に黒岩と云所に関をすへけれ。さすかおし返しまいらするに及はずして結句関守共名号を給はり法名を望つきしなり。これしかしなから遊行擁護の神 三嶋の大明神送らせ給ふ故也と云々。又越中の乗船のとき船中にて、行舟を追かぜにきけ杜宇磯は夏山花残る比。間□ 又小津より竹井右近大夫と云俗人塚川迄同船にて送り奉りて帰し比つかはさる。

忘めや四十八の瀬なみこえてとをきさかひにをくるころを越後府中称念寺にて一会に、杜宇やときは月のかつらかな或時よみ給ふ道哥、

唱れは同じ仏になる故に名を阿弥陀仏と我人をいふよしあしの心なからに唱れは南無阿弥陀仏に往生る也思ふ事又いふことの限りになむあみた仏と息たえぬへし唱れは口より出つる息ほとけむねの蓮を台にはして

如実知恩のころ又赤肉段云西門に有一々無為真人と云かれこれなる

へしと、又男女老少に算をくはり給ふ。道路にてまうけ給ふ一首、もとよりの南無阿弥陀仏の名をよへは南無阿弥陀仏とこたへ出ぬる。

五月五日に、

あやめ草かりの此世に思ひきや六十一夜の枕せんとは

又ある時当座の題に寄、山恋といふことを、

おしこむる胸のおもひをあらはさはふしの煙やしたになひかん

霧中雲

いつくにて消ん限りもしら雲のまよふを旅の行衛とやみん

同じ六月信濃国高梨撰津守入道一座興行有しに、

八千代見よ花さくさくれ石の竹 そのうち長子孫太郎三重の亭にて

発句、 風ふかぬ世にさへすし宿の松 又津守入道の所に

て一統に、 月前杜宇、

月のうちの宮古鳥かは時鳥雲よりもる夜はの一こゑ

尺教

あし原の国にそ仰く彼の仏にはを法のはしめにはして

中野新善光寺におひて或人の老母中陰のうちに絶入し奉りて、塔婆を

立しかは意趣を作らせ給ひ、同一偈を結給ふ。意趣こと書多々に及間

略抄す。

善光寺東報身土 往覆衆生一子同 本是弥陀悲母徳 転定開悟仏名

功

黒川西念寺におはせしときやうやく近日、廿五代を定させられ閑居へ

赴かせ給ふへき心あてにてよませ給ふ。

暁の月にあらねといりかたの山のは近き我身なりけり

六月廿八日海野常照寺にて一会ありしに、

伊(マ)のる事なる瀬もちかし御被川

代々の尊像を常照寺にて画師に命せられて二幅に移しせらせ給ひて、
賛金札と云事を、(増)拳(マ)多(マ)接(マ)少古今語 六十万人金札員 日本州名斯
裏在(マ) 宜哉天下修行円(マ) マトカナルコトヲ

又一幅の賛 二寮其阿拜贊

東上還来勸(マ)三出離(マ) 教門末法萬余時 要津立(マ)度(マ)群品(マ) 世々伝灯歴
代師

信濃野沢にて八月十五夜に、 あさかほや有明の月の花の宿

同廿九日信濃より甲斐へ移らせ給ふに、国堺近き所に村山云里に日な
たの図書助と云人有。上人に海野におひて結縁し奉り、此度途中迄牛
馬など数多引せ迎にまいり自身兄弟共に輿をかきさゝけてわか氏寺へ
入まいらせ中一日してわか見(マ)この長泉寺へ移せ給ふに、次の夜当国の
利益始にとて臨時のをとりを図書助興行す。然に其礼謝のために等覚
院臨阿を遣さる。時に図書助かたりて云、今夜親類の老若俄に頓死
す。をのゝ集りて歎きあひけるに数刻有て目をみひらき物を云出
ぬ。われ広き野を西へさしてあゆみ行けるに、此度上人より遊はし給
はる名号我先にたちと導給ふとみるに道中にて此名号のたまはく、汝
か命いまた限りにはあらず、然れば是より帰り候へ、必はたして死せ
ん時は、我むかふへしと云々。此儀を等覚院帰参して披露して(マ)ける夜一
首をよみ給ふ。

名と寐二なければ六の字の黄泉かへりをひくもことばり

又その比長泉寺へ信野の伴野出羽守、同名修理進といひけるを使者と
して申され、今日はことしの御越年海野太平寺にて兼約申され候へ

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

共既(マ)の御一代の御定を海野常照寺にて御沙汰のうへは、伴野金台寺の

儀 一遍上人様御編衣の光りも此所よりあらはれ、又金磬を初て鑄さ
せ奉る事も此地よりおこり侍る程の由緒有事なれば御越年をは伴野に
て申へしと云使者に修理進まいられし時伝語有しは、去五月十九日に
ことし十四になる子を先たてゝ侍るとて、その親過去帳に入侍る。其
後或夜かのわらはへ母の所へ夢のう地(マ)に來りて、我よき所へうつされ
奉りぬ。此後はいつても上人の御座の所にあるへし、こよひは臨時のお
とり有まいるへし、出立に食事せんと乞ける間、やかて飯をとゝのへ
てあたふるとおほして夢おとろきぬと云々。こよひ臨時のおとり有と
は九月三日の夜、長泉寺にてのよるのおとりの事也。仍一首、

梓弓はつれぬ数もなき人のことはの筈に思ひあはせぬ 是はむかし
西行法師天王寺の過去帳に入て 梓弓はつるへしと思はねと兼て
無身の数に入かな と詠せしをもと哥となし給ふとなり。

廿二祖追膳於二蓮寺 執行給時塔婆銘曰、 伝燈弘法恰三歳 回国修
行西又東 恋慕先師遷化后 同生何日一蓮中 爽以加葉如來者付(マ)法於
尺迦如來一尺迦如來者付(マ)法於弥勒菩薩一焉。番々世々之成道共(マ)以如(マ)斯
耳。爰先師上人者元祖統(マ)廿二世之高縱一給勸化兩年之中從(マ)海東駿州一
迄(マ)京南河内一矣。功成名遂後三歳之間嘗(マ)新地一兮隱遁矣。而兼察(マ)三國
之安危一給退出矣。濃州輒(マ)逆乱兮一于(マ)今不(マ)治矣。臻(マ)江州乘台精
舍(マ)二誼(マ)滅度一焉。爾來暑往寒來兮既一千日、花開葉落方第三回也。幽
溪問(マ)雲往還之古跡(マ)似(マ)空孤山望(マ)月行路之昔察(マ)如(マ)見矣。平日渭樹行雲
之情東語西話之因更無(マ)忘矣。稟(マ)慈悲於性一備(マ)柔和於心一厥(マ)恩誰歷(マ)
億劫(マ)二可(マ)尽。雖(マ)送(マ)多生一猶難(マ)報窮一。而今慈顏(マ)隱兮不(マ)版夜月雷違(マ)二恋
昔之光(マ)二德音絕今無(マ)一 葦 夕嵐独增(マ)懷旧之響一。不(マ)如積(マ)二善於此界一

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

誘シユ三ニ再ハ會ヲ於テ彼ニ土ニ以テ旃ヲ爲シ報ノ恩ノ之妙業ト焉。抑テ去レ戊寅年秋之頃化導相續兮三稔自江州兮三山城已下乃至北國臻三甲州結縁連三月而增光矣、利益逐日繁昌矣。是子師恩也。冥力也。彼隨煬帝者欲酬二智者大師之恩一、竜顔之涙流三台兵之脚。周文王者欲謝太公之憂許三同車一兮。販三於渭浜一矣。雪山童子者投身於一句下、常啼菩薩者裂三肝於半陽前一矣。菩薩大聖尚然矣。聖主賢王皆以是等矣。何矧各累年之慈訓乎。何矧予付法因縁一乎。然者又於二一代之知識乎。亦復二世之加會乎。

凡夫四生必滅有百年匹保矣。釋三縑素於新日一皆消北亡之露訪三親疎於遠近一向鼻東岱之烟矣。尊靈涅拏後鳥免之光陰押移早臻大祥之忌辰一所展者弥陀三味之齊席也。遙伝法音於摩尼殿風三所一修者昼夜六時之行法也。將レ顯証理於安養界之月三日三夜称名功力廻施十方世界群萌一。仍起立駄都之旨聿上件之儀矣。嗟乎、清淨光寺者古之住所往西刹不レ返上品蓮台者今之宝座也。得レ無生不レ退有縁之真俗此時悉導無縁之迷侶今日可度而已。

永正上章執除去莫初九辰 沢山当任持廿四世陀阿 白敬

十月十七日武田大井入道宗芸一蓮寺の客殿をかりて一会転行の時、時雨きぬ雲や中たちあひやとり 脇案けそちきるこて紅葉ちる山

又そのうち宗芸よりまいらせらる。

ねてあかし詠めてくらす空の雲に同し心の行衛しらせよ

御返し、

ねてありし詠て暮すことのはの花や蓮の上迄をみん
泉のさかひ永福寺坊主其阿、仲冬十日わたりの霜雪遠路を凌参られけ
るにつかはさる。

黒髪に雪はふりつゝ旅衣はるゝ木曾の末やかひかね

これは両尊うけおちの人数彼寺に集ると聞めし御たより有けれ共、参る上はとてやかて免許し給ふ。其心を末やかひかねとよませ給ふ。又五天到日応頭白といふ詩の末のころかと云々。霜月廿五日に武田殿俄に新造をとゝのへて申上らるゝ時御発句、なれてきけ声を八千代の友ちとり 当国の名所にしほの山さし出の磯に住衛君か御代をは八千代とて鳴と、古て第十四巻に待るをとり給へりと。

抑藤沢旧跡の御本尊は去癸酉年より駿河長善寺に移し還奉らる。既に十年に及び藤沢の徒 (癸酉年の左右に後筆註あり)。一海上人云、永正十年也、此年伊勢早雲ト三浦道寸ト合戦四月十九日藤沢山一□不残□火也。

衆此本尊の御まへにして昼夜の行事をつとむる事もなかく、又再興の期もいまた到らざる事を常に愁歎有しも、廿五代化導相續以後やかて越中へのほらせ給ふへき処に、彼国大乱おこりける間、弓矢おさまらん時迄と甲斐迄不慮に移り給ふ。然に駿河近き所へかく移来ぬれば、本尊を迎へ移し奉らんと云心ひしくと思ひ立給へり。是則仏智にこそとて御代官をまいらせらる。よつて事故なく御来候有。上人庭前へはたしにならせ給ひ帽子を脱て出迎ひ給ひ、御輿に手をかけ一蓮寺の仏壇へ入奉られて惣礼十念有て、半は歎喜し半は悲歎し給ひき。

其故は仏智も御同心有て滞なく御光臨をはよろこばせ給ふ。雖然宿世つたなくかゝる時代の藤沢の有名無実の衆頭となる事、又は此本尊には日光もまします蓮花座もなく、観音には御手もうせ、同く御光も蓮花座もうせ給ひ、勢至も同前にやつれさせ給ふことをみあへさせ給はず、彼此に落涙し給ふとや。乍去金剛那羅延身の仏跡の三十二相八十程好百福莊嚴は仏敵の伊勢の早雲も三浦の道寸も損亡し奉らしとそ

のたまひける。かやうに移し置申されて後は、午夜座師に六度つゝ折念を凝しめらるゝ事有。一には一山建立を遂て本尊鎮守鎮座し奉り大衆俱会の儀也。二には此所願時至らす機熟せず、命をつゝめさせ給ひて早く来迎引接有へしとなり。願として成就せすと云事なしとあれは、定て仏智は往生の一路を御同心あらんすらむと時々ひとりことし給ひき。まことに命にもかへて思ひ給ふをは、仏もあはれにも悲しくもおほすらんかし。又有る老僧原にかたりたまはく、如此本尊をも迎へまいらせ越中に閑居の地をもしめ置ぬれ共、求一得苦の有為のならひ叶はぬうちに生死一大事に及ふ共ゆめく、一念も妄心を残すまじきなりとて、発願の文の虚空法界尽我願亦如是の心を一身のうへになぞらへて読し給ひぬ。此折節一条に塔頭の弥阿と云寺僧一日藤沢六寮坊主僧阿にかたりていはく、去春或夜の夢に広き所に仏檀有、三尊まします。子細を人に尋ね申に、これは藤沢の御本尊にておはしますと云々。依て御前に参り礼し奉るに観音おりくたらせ給ひ、蓮花座を傾け寄て是にのれとのたまふ。深く恐れまいらせて合掌すとおほえて折驚ぬ。其以後此由を火ともし覚阿にかたり候得は、彼覚阿合て云扱は出世し給ふへきそと云々。然間又人にもかたり候はすして打過る処に、上人九月の末にはからず御移り有を見奉りて思ひ合るやうは、ありし告は此御移りの事なりと云々。又此門前に当寺結縁の俗人近日ひるねをいたしける所に夢中に人の云やうは、藤沢の御本尊寺へ御出有をはしらさるかなとまいらさると答て云。いまたしらすと又人返して云、しらすんは塔頭の弥阿にとへ、それか子細を知へしと云々。時に庫裏へ彼俗人来りし折節弥阿も庫裏へ出合せぬと云々。此旨を六寮坊主披露有しかは、上人わか当国修行の事も扱は仏智なりけるそと云々。此度爰許へ

勸化有へき事は、九月上旬にふと大守の方へ届させ給ひぬ。
仏の夢想は過し春の事也。

庚辰之歳喜別行前一絶口課曰。

老去閑居求不_レ成 今年既暮欲_レ還_レ明 何時消尽滴頭雪 縦遇_二春風_一

莫_二緑生_一

一行三昧の心を別時以後書出し給ふ。

萬代の末を兼てそ彼ほとけ教置ける御名の一こゑ

八萬四の千くさのおしへまで唯一声に唱へうるかな

永正十八辛巳元日試筆、

販去来吾_レ本家 多年為_レ客隔_二天涯_一 東風可_レ送西行道 今日逢_レ春先

憶_レ花

右本家者指_二西方_一云々。

あらましの山をはよそにきゆる共身の浮雲よ心かへすな

過し十二月廿九日辰剋法座におゐて夢想、

長閑に向ふ住吉の影 去々年幾代ともさしとをの発句の告も同日同時也。

日同時也。

正月一日に近所に大明神まします、其神子伊知と云もの始て参り、御

十念受給はりぬ。彼夢想をこゝに思ひ合給ふとや。二日の会に、

おさまるや春のかひかね天津風

同七日 松に有_二春色_一と云事を、

住吉の神やしるらん緑そひ春に幾代かあひ生の松

山早春

立かへり春は来にけり富士の根におほふ霞や天の羽衣

これは一条に開山法阿より以来天衣つたはり侍りしか、前任十二代時

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

回録の時煙と共に天にのほりしとや。それを祝し給へりとなん。又彼羽衣当寺の住持代によりてかかえて現し有すへしと云告、炎上の砌有とかや。越中と越後の鉢楯年を重ね。然に庚辰十二月廿一日に時節極りて軍破れぬる由、二月八日実説有、則位牌を立、三昼夜の弔を始、同十日は四十九日に当りける間、臨時のおどりを興行し、塔婆を立彼の意趣に云く、

極冬闘諍仲春听 脱鎧向西称仏名一 平日終焉無二意 弥陀感果必来迎

厥以积氏璃瑠王之闔者天竺之往事也。积軍皆滅矣。漢祖楚項羽之諍者震且之古事也。楚陣悉亡矣。源平兩家先代当家之合戰者在諸人之耳一矣。是皆欲界之衆有為之習也。爰去乙亥以降双越結一亂入事軍ニ三度一矣。失レ利事兩度也。其間七ヶ年絶ニ往還一併如ニ吳越一矣。旧冬大呂廿一日從ニ辰剋ニ至ニ酉時ニ越后之軍旅六百余越中之軍兵三百余討死云々。遷ニ夕陽ニ國軍敗北兮殘党或渡ニ永河ニ事十一瀬。或凌ニ素雪ニ事四五里也。因レ茲半濁水半凍死者二千人云々。于時越前守慶宗下レ馬兮脱ニ甲冑一嗽ニ雪西面合掌念仏十声兮自殺云々。嗚呼是更非ニ卒然之儀ニ所以者何死生有レ命矣。又畜因果必然之理歟。抑予為ニ師檀ニ事近三十四年一矣。曾 葺 一日之檀那者百劫之結縁也。知哉累年乎。兼付与法名於弥阿二而三年也。相ニ疑他力於西方ニ而多歳也。伝聞臘月廿日夜夢ニ向西称名事三返云々。撰取不捨之告是也。以此 題ニ干上ニ拙偈合ニ彼百一耳。迎接如レ指掌往生不レ廻レ眼矣。乃至為ニ當日一戰之群陣衆一書レ之。若在 三途勤苦之処見此光明皆得休息無復苦惱文亦復法界平等利益耳。永正辛巳春時正中日。

ろさしをうけ取(4)わき法のえにしを結びぬる間、此世ひとつならぬ契ふかし。彼とふらひとして六字を沓冠にをき、三首の和歌をつらねもて手向の誠をあらはし、日を重ね夜をつらねつとめあかしつとめ暮し、臨時のおとりといふつねには稀なる行ひ迄當侍者也。

無数になへかえつゝ今よりや蓮の上をなかくいのらむ

あさ夕にわれに心をそへし人を思ひおもへはまさるかなしみ
たのむより弥陀の弥の字を法の名に書あたへぬる跡おしそ思ふ
いにしとし しはすのうちの はつかあまり 一日のそらに
みこし路や なかなか国に みたれあひ いつるひかりの
入まてに たゝかひあひて そのうちに むまよりおりて

よろひをも ぬき捨しとき 雪をとり くらをすゝきて
にしへむき 十声のみ名を となへつゝ みつから命
きへにしを つげんと使 きつらきや あとを十日に
七日つゝ 七にあたる 夕より つとめ行ふ

日をかきね 夜をもつらねて うたをよみ 又もろこしの
ことの葉に 文字をならへて かの人に 四十にをよふ
えにしをも かきながしぬる なみた川 思ひしつみて

なき人の おもかけのみの 身にそへは おくるもあみた
販るも又 南無阿みた仏と その人の 名をとなへいれ
跡をとふ 心の程は かの池の 蓮のうへに

ひらけぬる 悟りのむねに しるらめや きてもくゝと
をたまきの いとくり返し おもふにも つきしたかひし

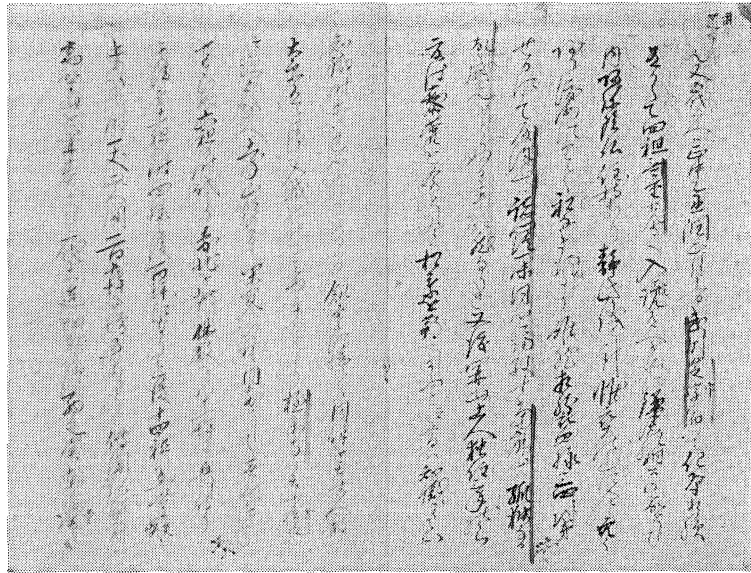
人のかす 千人くゝを 十あまり あはせあらそふ

ときの間に 弓矢いかなる みちなれば たゞひとりには
 なりはてし はてを思へは 生れこし その朝より
 身のをはる 夕のかきり さたまれば たゞ先の世の
 ひくひなり 今行末は^(カ) こくらくに 往生れつゝ
 ふたゝひは ゑどに帰らぬ 身なるへし おなし野原の
 雪とのみ 消にし数は したしきも うときもひとつ
 弥陀の国 人をえらはぬ 台にそひく
 相州藤沢再興の間、越中の府に閑居の地一山建立の契約、越前守慶宗
 去々年の冬越年の比より内証外用談合畢。因茲去年の三月彼地出歩の
 砌此儘逗留あて、廿五代相統の儀と、のへらるへき由懇望有けれ共、善
 光寺の御事本願の念仏のあるしにてましますは一代一度の参詣をもと
 けそのうち信州のうちに化導をもゆつり侍らむとてたゞせ給ふ比、
 かの報土寺の新地のかり屋に吉江仏土寺坊主其阿に遊行軸屋僧阿をあ
 ひそへのこしをかせられけり。慶宗存生ならば三年五年の間には如形
 造営もなり、新寄をもあるへき事うろおもひもなかりしゆへ、過し七
 月九日に御定の儀成就有て、やかて十日あまりには海野より越中へ趣
 かせらるへき分にて侍りしに、越後の軍勢再乱のきこえ有し故、一運
 落居の間と伴野より甲斐へ修行なし給ふ。扱も越中おるて帰伏の檀那
 如此なり来る事門徒の愁歎一代の不運と思はせ給ふ。雖然両国のあら
 そひの儀は天命のなす所、彼一族のほろふる事、時節の極る故也。夫天
 意は一人の為にその時を狂す、日月は一物の為にその明を晦ますと
 云々。兼又大上人十六年諸国勸化のうち或時は諸神詫宣の告有。或時
 は紫寒^(紫カ)散花の相を現す。天も感応し神も納受す。しかれば上一人より
 下萬民に至迄崇敬をなし、絶代の奇特目にふれ耳に聳る間、嘉元二年

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)

甲辰より当麻山無量光寺を草創^(草創)有て、元応元年己未に至る迄又十六年
 居住のうちに造管成就して遷化、のち第三祖三年在寺有て入滅し給
 ふ。四祖は元応元年己未四月因州西光寺にて賦算し給。三祖は次年庚
 申七月朔日涅槃に入給ふ。然共四代上人しるて六年勸化あり、合修行^(合修行)七
 年也。加様に回国年をふるうちに当麻山の事相違出来すとみえたり。
 正中二年乙丑藤沢山開闢此年以來^(以)三年独任也。又五代上人は正中乙丑
 潤正月十一日武州芝宇宿にて化導相統有。かくて四祖無量光寺へ入院
 有へき所に鎌倉の相公の命として内阿弥陀仏住持あり、静此儀討、惟
 宝の山に入て空く帰り渡海に望て船なきに^(似)たり。雖然相襲血脈三四
 と次第せるに由て藤沢山へは諸門徒一味同心に帰敬す。当麻山は孤独
 なる故威光をとりぬる事顯然なりき。又後開山上人独任三年のうち夏
 は藜藿^(藜カ)を食とし冬は松葉を薪とし給ふと云々。昔は知識も真知識、
 時衆も道心ふかゝりける間飢寒に堪て同伴をなす人数大衆有と御入滅
 の記にみゆ。寺は元より極楽寺と云小舎有と云々。次五代上人十一年
 山住の間も間寥の躰同前にして春秋をくくらせ給ひぬ。六祖の時代よ
 り敷地を転し仏殿を八十一坪に興し侍り、其後第十一祖の時回録の後
 百坪になり、亦復十四祖の在世に炎上ありし時、一丈二尺間一百廿坪
 に増興ありと云々。伝聞弘法大師高野山を開基有しも一代には造切^(造切)な
 らず、西之堂東之堂と云小精舎はかりを立て一山の諸伽藍者地形を定
 め^(定)證^(證)図^(図)を残し置給ひて入定有しに、其後星霜をかさねて御造畢有と
 云々。いつれの靈仏靈社も少^(少)より大に至る。合抱^(合抱)之木生^(生)於^(於)毫末^(毫末)九層
 之台起^(起)於^(於)累土^(累土)老子経に有。抑越中より注進出来の比上人歎してのた
 まはく、われ去年当年の吉凶をしかしなから四代上人の隱遁の始に大

遊行二十四祖御修行記(上) (河野)



(後筆) 充按己上筆者廿五代御真跡歟、宝庫中廿五祖之自記有「選択集等」云々。己下者別筆也。不知其人。

(島根大学教育学部哲学倫理学研究室)

方は相似たりと。但越中に去年の春抑留に任て止り、草坊をもたてくわへぬるうへにて如此の凶事出来有は、美濃国の新地の企の遂さると云、彼此都鄙真俗の嘲口惜かりなむと云々。三業を天運に任せ四儀を菩提に譲ると云先言耳に有深く甘心する所なりと。